

平成 23 年度 みんなく若手研究者奨励セミナー

「マテリアリティの人間学」

発表要旨

発表題目

変化する茶のマテリアリティ

—ミャンマー、シャン州ナムサン郡の茶生産、流通を事例として

東京外国語大学大学院 博士後期課程 1 年

生駒美樹

発表要旨

1980年代以降、人類学ではモノあるいはモノと人との関わりを主要な課題とする新たな研究の潮流が生まれてきた。背景の一つには、「言語論的転回」以降、意味やシンボル、象徴など、より抽象的なシステムや関係性が主な関心事となった人類学において、モノそれ自体が看過されてきたことに対する反省がある。こうした動向のなか、ブルーノ・ラトゥールらが、人間と、非人間であるモノすべてにエージェンシーを認め、われわれを取り巻く世界は人とモノとの複雑な相互作用のネットワークからなると捉える、アクター・ネットワーク理論 (ANT) を提唱した[ラトゥール 2007]。これは、従来の言語モデルによるモノの捉え方、あるいは人間を主体とし、非人間（自然を含めたモノ）を人間によって操作されるだけの客体として扱う二項対立を克服しようという近年のモノ研究の動向に大きな影響を与えた。また、モノが担う役割に着目する近年のモノ研究にあっても、実は検討が不十分であった物質性(materiality)に着目する重要性も指摘されている[古谷 2011]。「マテリアリティは、それを生み出す社会や文化の意味体系や文脈によって構成される面があることは否定しないものの、逆に社会や文化自体も特定のマテリアリティによって構成される面がある」[床呂、河合 2011:12]。

本研究では、こうしたモノ研究の研究成果に依拠し、ミャンマーシャン州ナムサン郡の茶生産、流通を事例として取り上げ、茶のマテリアリティを検討することにより、茶と、それを作り出す生産者の社会あるいは文化が互いに構成的な関係かを明らかにすることを目的とする。本研究で用いる資料は、2010年3月にナムサン郡P村で、2009年と2010年に茶流通の中心地マンダレー市で実施した短期調査のデータに基づく。

ミャンマー最大の茶産地ナムサン郡は、ミャンマー北東部の山間部に位置し、耕作地の8割以上が茶畑である。ナムサン郡では、同じ茶の生葉から、①食用の後発酵茶(漬茶)、飲用の②不発酵茶(緑茶)と③発酵茶(紅茶)の3種類が生産されている。製茶工程は、後発酵茶は、加熱(殺青)→揉捻→嫌気発酵、不発酵茶の製茶は、加熱(殺青)→揉捻→乾燥で、加熱して揉む工程までは共通している。イギリス植民地時代に生産が開始された発酵茶は、機械を用い、萎凋→細断・揉捻→発酵→乾燥→区分けという工程を経て製茶される。後発酵茶と不発酵茶は、伝統的には各家庭で製茶されていたが現在は、中国製の蒸し器や揉捻器を導入した工場が操業している。調査を実施したP村には、3軒の発酵茶工場と、2000年以降に操業を開始した2軒の後発酵茶工場がある。

本研究で着目するのは、変化する茶のマテリアリティである。茶は茶摘み後すぐに酸化という変化がはじまるため、すぐに加工を必要とする。そして、茶は、加工によって発酵したり乾燥したりさまざまに変化する。茶を加工するのは人間側の働きかけだが、茶のマテリアリティは人間側の技術を制限する。茶の種類によって技術が限定されるために、同じ村で摘んだ生葉であっても、製茶のネットワークに参加するアクターが変わるのである。例えば、後発酵茶や不発酵茶を作るためには、家庭で行うのが一般的であり、動員される

のは、家族や家庭の台所や鍋である。一方で、発酵茶は家庭では製茶できないため、工場
で製茶する。工場では、製茶機稼働に十分な生葉を得るために茶農家から生葉を購入する。
また製茶機を操作する多くの労働者が必要であり、平地からビルマ人の期間雇用労働者を
雇う。これは平野部の農閑期が、ナムサン郡での茶の農繁期が重なるためである。また、
同じ工場でも近年、後発酵茶の製茶を機械化することにより後発酵茶工場となった家庭を
みしてみると、後発酵茶の蒸し器や揉捻器は少量の茶でも稼働できるため、発酵茶工場ほ
どの労働者や生葉を必要としない。しかし、工場に生葉を売りにくる茶農家や、加熱や揉捻
の工程だけを工場に依頼する茶農家らが出てきて、次第に生産規模が大きくなってきた。
さらに流通に注目すると、工場主は、工場の創業以前はマンダレー市など都市部の問屋に
茶を出荷していたが、工場操業を機に都市部で自ら店を開き販売に参入した。

このように、茶のマテリアリティは、ただ単に自然に還元されるのではなく、また社会
や文化に還元されるのではない。ナムサン郡での茶生産や茶流通は、茶農家や工場主、労
働者、流通業者といった人や、茶、製茶機、自然環境などのモノというさまざまなアクタ
ーと関連しあい、また新しいアクターの参加により従来のアクターが変化、あるいは切り
離されたりしながら、変化しているといえよう。

参考文献

- 古谷嘉章 2010 「物質性的人类学に向けて—モノ（をこえるもの）としての偶像」『社会人類
学年報』36、東京都立大学社会人類学会編集、pp.1-23、弘文堂
- ラトゥール、ブルーノ 2007 『科学論の实在—パンドラの希望』川崎勝、平川秀幸訳、産業
図書
- 床呂郁哉・河合香吏(編)2011 『ものの人類学』京都大学学術出版